

2022年 4月25日

2021年度「市民防災・減災活動公募助成」事業実施報告書

団体名 笑顔つながるささやまステイ実行委員会
代表者・役職名 氏名 中村伸一郎

▼報告書の扱い、および記入にあたっての注意点

この報告書(精算報告書以外)は、ホームページなどで公開する予定ですので、広く読まれることを想定してご記入ください。また、編集段階で、表記・表現等を事務局で編集する場合がありますので、あらかじめご了承ください。語尾の表現は「です・ます」調をお願いします。報告書に掲載するため活動の内容がよくわかる写真(2枚程度。写真の肖像権問題がないものの提出をお願い致します)を添付して下さい。

1. 助成プロジェクト名

笑顔つながるささやまステイ2021事業

2. 団体の概要(創設の経緯、創設時期=法人で、法人化前に任意団体での活動がある場合、その段階からご記入ください。会員数など。180文字程度まで)

NPO法人が2012年から毎年実施していた保養プログラム。「原発事故の影響を受けている子どもたちに、放射線量の低い丹波篠山の自然の中で思いっきり遊んでもらいたい。」その想いを引き継ぎ、10名ほどのスタッフを中心に、地域のボランティア、高校生・大学生のボランティアの協力を得て、2015年から現在の実行委員会で開催しています。

3. プロジェクトの目的とその背景(※応募申請書に記載のものでも可) 250文字程度まで

福島第1原発事故の起きた2011年に出された原子力緊急事態宣言は10年たった今も解除されていません。福島県によると2020年12月末時点で、除染による放射性物質は15,093ヶ所の自宅・公園・学校などで現場保管されたまま。放射性物質が身近にあり、被ばくの危険がある暮らしが続いています。そこに暮らす親子は、災害からの復旧復興とはほど遠く、今も災害の渦中にいるのです。そのため、放射線量の低い地域で、放射能を体に取り込まない機会(保養プログラム)が今もなお必要とされています。

4. プロジェクトの内容(※当初予定と変更がない場合は、応募申請書に記載のものでも可) 300文字程度まで

2022年3月25日～29日の4泊5日の保養プログラムを実施し、原発事故で放射能の影響を受けている子どもたちとその保護者を招きました。当初計画では、山小屋風の建物で合宿形式での開催でしたが、コロナ感染リスクを回避するため、市内の保養施設ユニットピアささやまを利用した開催に変更しました。

放射線量の高いエリアやスポットの存在する福島では難しい「自然の中で思い切り遊べる機会」を子どもたちに提供し、健全な発達・成長を育むことにつなぐことができました。また、子どもたちを被ばくから守る暮らしを優先している保護者には、自分自身を大切にできるよう、大人だけでゆっくり楽しむ機会を提供することもできました。

5. プロジェクトの実施で得られた「結果」(OUTPUT。実施回数や参加者数など)、「成果」(OUTCOME。事業によって生まれた直接的な変化)、「社会的な変化」(IMPACT。事業が社会に与えた影響)などの『効果』 300文字程度まで

5家族20名(大人5名、子ども15名)を2022年3月25日～29日の4泊5日で丹波篠山に招き、保養プログラムを実施しました。宿泊場所をユニットピアささやまに変更したことで、子どもたちが遊ぶ環境は、施設内でのフィールドアスレチックや釣りなどに変更となったが、放射線量の低い自然豊かな中での活動を行うことができた。

実施に協力いただいたみなさんやボランティアとして参加した大学生や高校生が、「福島では今も放射能の影響を受けている子どもたちがいる」と知ることは、福島の今を知るだけでなく、防災意識の向上へとつながります。

6. プロジェクト実施にあたっての課題、今後の展望など 300文字まで

新型コロナウイルス感染症の影響を受け、計画を変更しなければなりません。コロナが収まれば、例年通り、すぐそばに川が流れ、自然豊かな環境の山小屋風の建物での開催を検討していきます。

長期的に見れば、1984年に起きたチェルノブイリ原発事故では、事故当時の子どもたちが大人になり、その子どもたちを対象に30年以上たった今も保養プログラムが行われています。福島第1原発事故から11年がたちま

したが、丹波篠山での保養プログラムも、さらに長く続けていきます。そのためには、福島第1原発事故による影響や保養プログラムの意義を、より多くの方に広く伝えていく必要があると考えています。

7. 参考資料：プロジェクトで作成したチラシ、パンフレットやマスコミで紹介された記事等の現物またはコピー、活動状況の写真などを、“必ず”、別途、ご提供ください。

